問題4-1 (Q(瓦,日) = Q(瓦+日)に関する問題)

- (1) d= 12+日のQ上での最小多項式を求めよ、
- (2) Q(\(\overline{L}\), \(\overline{L}\)) = Q1 \(\overline{Q}\) \(\overline{L}\) \(\overlin

解答例 問題 3-4の結果より、 $Q(\Sigma, 5) = Q(\Sigma + 5)$ 、 $[Q(\Sigma + 5): Q] = [Q(\Sigma, 5): Q] = 4 を示ろう、 <math>[L:K] = dim_K L$ $2\times 2 = 4$

Q[x]/(x2) | おかざらな。 (Q[x]の中で' x2-2をひとみなして できる環 | 1 (Q[x]の中で' x2=2とみなして で"きる環

 χ^2-2 は Q上 既約なので $\sqrt{2}$ Q Q上での最小 90 遺式 になる。 $\sqrt{1}$ $\sqrt{2}$ $\sqrt{$

内辺を2乗すると、 $3 = \alpha^2 + 2b^2 + 2ab$ なので、 $3 = \alpha^2 + 2b^2$ かっ ab = 0 となる、しかし、これは不可能なので、「 $5 \oplus Q(\sqrt{\Sigma})$ 」。

る \oplus Q(元) \pm 1, [Q(元,百):Q(元)] = [Q(元)(五):Q(元)] > 1.
る は $\pm 2^2 - 3 = 0$ の解なので $[Q(元,百):Q(元)] = [Q(元)(五):Q(元)] \le 2$.
したかって、[Q(元,五):Q(元)] = 2, [Q(元):Q] = 2, $[Q(元,五):Q(元)] = 2 \pm 1$, $[Q(元,五):Q] = [Q(元,五):Q(元)] [Q(元):Q] = 2 \times 2 = 4$.

問題 3-5の解答例を 移照せよ、 別の才法もある。 (メ2-3 はの(区)上既約)

(1) [Q(取+5): Q] = [Q(取,5): Q] = 4 より、 (2+5の Q上での最小多項式 は4次式になる、ゆえに、 X=(豆+5)で0になる f(x) ∈ Q(x)でモニックで4次のものかい 「五+5の Q上での最小多項式になる。 「大(たり的でもうしわけなり f(x) = (x - (5+5))(x - (5-5))(x - (5-5))(x - (5-5)) (x -

 $f(x) = (x - (\sqrt{12} + \sqrt{3})) (x - (-\sqrt{12} + \sqrt{3})) (x - (-\sqrt{12} - \sqrt{3})) (x - (-\sqrt{12} - \sqrt{3})) \leftarrow 22 h^{4} h L 2 h$

この十(ス)が「10+月のQ上での最小多項式になる、

(2) $[Q(\underline{r}):Q]=2$ より, $Q(\underline{r})=Q1\oplus Q\overline{r}$, $[Q(\underline{r})(\underline{r}):Q(\underline{r})]=[Q(\underline{r},\underline{r}):Q(\underline{r})]=2$ より, $Q(\underline{r},\underline{r})=Q(\underline{r})1\oplus Q(\underline{r})\underline{r}$ これらより,任意の $\beta\in Q(\underline{r},\underline{r})$ は,ある $\alpha,b,c,d\in Q$ によ,z, $\beta=(\alpha1+b\underline{r})1+(c1+d\underline{r})\underline{r}=\alpha+b\underline{r}+c\underline{r}+d\underline{r}$ と表される、

もしも、 α , b, c, d \in Q かっ $\alpha+b\Omega+cG+dG=(\alpha 1+b\Omega)\cdot 1+(c1+d\Omega)\cdot G=0$ ならは、 $1\times G$ の $Q(\Omega)$ 上での一次分生性より、 $\alpha 1+b\Omega=c1+d\Omega=0$ となり、 $1\times G$ のQ 上での一次独立性より、 $\alpha=b=c=d=0$ となる。 ゆえに、1, Ω , Ω , Ω は Q 上 - 次独立である。

以上によって、 $Q(\bar{\nu},\bar{\mu}) = Q1 \oplus Q\bar{\mu} \oplus Q\bar{\mu} \oplus Q\bar{\mu}$ が示された。

以上の証明は、体の拡大の列 $M/L_L/K$ (MOLOK) が与えられるとき、 [M:K] = [M:L][L:K] ([M/K] = [M/L][L/K]) が成立することの証明の特殊化になっている、

(3)体の同型写像たち Q(エ、ぼ) = Q(エ、(エ)(エ) \longrightarrow Q(エ)(エ)/(ヒ²-ヨ) \longrightarrow Q(エ)(-エ) = Q(エ、ぼ) \longrightarrow f(-エ)

の合成をてと書く、ても体の同型写像で

 $T(\beta) = \beta \left(\beta \in \mathbb{Q}(\mathfrak{I})\right)$ ゆえに $T(\alpha) = \alpha \left(\alpha \in \mathbb{Q}\right)$ かっ $T(\mathfrak{I}) = \mathfrak{I}$ $T(\mathfrak{I}) = -\mathfrak{I}$ をみたす、これでほいての存在が示された、

てかの(瓦月)の体の自己同型でかって(a)=a (a∈Q),て(豆)=下,て(豆)=一豆を みたしているならば、任意の a,b,c,d ∈ Q について

ての形が一意に決まってしまった、これでほしいての一意性も示された,

の存在と一意性は「Iと「Iの立場を取り投えた同様の議論で証明される、 口 への唯一存在の証明も的で書き下せ、

(注) Q(x, x) \subseteq Q[x,y]/(x^2 -2, y^2 -3) を用いて、ほしいのとての存在を示すこともできる、この方針の証明も自分で考えてみよ、 $y: Q[x,y] \to Q(x,x)$ に準同型 Γ

問題4-2 d=wk J7, W=e^{2な/3}, ke Z とする. 以下を示せ、 ← w³=1, W+1なので

- (1) $Q(d, \omega) = Q(d, \omega d, \omega^2 d) (= (Qに x³-7=0の3つの解を付けかえた体))$
- (2) Q(d,w) = Q(d)1 \oplus Q(d) ω . (既出の問題の解答例の行星) を自由に使ってよい。
- $= Q(\lambda)1 \oplus Q(\lambda) \omega.$ (本自己同型てで) $T(\alpha) = \alpha \ (\alpha \in Q(\lambda)), \qquad T(\omega) = \omega^2$ $T(\beta) = \overline{\beta} \ (\beta \in Q(\lambda, \omega))$ $d = \omega^3 \overline{\gamma}, \omega^3 \overline{\gamma}, \omega^3 \overline{\gamma}, \omega)$ (問題 4-1 の $Q(\sqrt{2}, \sqrt{3})$ を $Q(\omega^k) \overline{\gamma}, \omega)$ にかきかえ たのかこの問題 (3) Q(ひ,い)の体の自己同型して をみたすものが唯一つ存在する。
- (4) $[Q(\lambda, \omega): Q(\omega)] = 3$, $Q(\lambda, \omega) = Q(\omega) 1 \oplus Q(\omega) d \oplus Q(\omega) d^{\lambda}$.
- (5) Q(d, w)の体の自己同型 Uで $\nabla(\alpha) = \alpha \quad (\alpha \in \mathbb{Q}(\omega)), \quad \nabla(\alpha) = \omega \alpha$ をみたすものが唯一つ存在する.

解答例 (1) d, wd, $\omega^2 d \in \mathbb{Q}(d, \omega)$ 出り, $\mathbb{Q}(d, \omega) \supset \mathbb{Q}(d, \omega d, \omega^2 d)$. $d \in \mathbb{Q}(\alpha, \text{Nd}, \text{W}^2d)$ $\nabla^2 \mathcal{N} \supset W = \frac{\text{Nd}}{d} \in \mathbb{Q}(d, \text{Nd}, \text{W}^2d) L^1), \mathbb{Q}(\alpha, \text{N}) \subset \mathbb{Q}(d, \text{Nd}, \text{W}^2d),$ ゆえた, $\mathbb{Q}(a,\omega) = \mathbb{Q}(a,\omega a,\omega^2 a)$ d, Wd, W²d は x²-7=0の解の全体

Whal, w, woo bothan になる

(2) (問題3-5(2)と同様)

となることがわかる。

(3) $d_1 \omega^2 \in \mathbb{Q}(a_1 \omega) \times d_1 \omega = (\omega^2)^2 \in \mathbb{Q}(a_1 \omega^2) + U_1 \mathbb{Q}(a_1 \omega) = \mathbb{Q}(a_1 \omega^2) + U_2 \mathbb{Q}(a_1 \omega) = \mathbb{Q}(a_1 \omega) + U_2 \mathbb{Q}(a_1 \omega) = \mathbb{Q}(a_1 \omega) + U_2 \mathbb{Q}(a_1 \omega) = \mathbb{Q}(a_1 \omega) + U_2 \mathbb{Q}(a_1 \omega) + U_2 \mathbb{Q}(a_1 \omega) = \mathbb{Q}(a_1 \omega) + U_2 \mathbb{Q}(a_1 \omega) + U_2 \mathbb{Q}(a_1 \omega) = \mathbb{Q}(a_1 \omega) + U_2 \mathbb{$ W2も1の厚約3乗根なので、W2のQ上での最大多項式もX2+X+1になる、 (うつす同型を

WEW212 (1年3問題)

体の同型写像 $Q(\lambda, \omega) = Q(\lambda)(\omega) \Rightarrow Q(\lambda)[x]/(x^2+x+1) \Rightarrow Q(\lambda)(\omega^2) = Q(\lambda, \omega) の$ $f(\omega) \longrightarrow \overline{f(x)} \longrightarrow f(\omega^2)$

今成をてと書く、ても体の自己同型で、 $T(a)=a (a \in Q(u)), T(u)=u^2 きみたす、$ これで、ほしいての存在は示された、

てかQ(a, w)の体の自己同型でて(a)=a (a∈Q(d))とて(w)=w²をみたにいるならは) $Q(a,\omega) = \{a+b\omega \mid a,b \in Q(a)\}$ でかり任意の $a,b \in Q(a)$ について、

 $T(a+b\omega)=T(a)+T(b)T(\omega)=a+b\omega^2=a+b(-1-\omega)=(a-b)-b\omega.$ これより, ほしいての一意性かわかる.

注意 d=3万のとき, Q(d) C R でかつ W²= (wの授差生役) なので\ 上のては複素共役を取る控作に一致する. しかり、d=U切, W切の場合はそうではない.

(4) dのQ上での最本多項式 x³-7 は3次なので、Q(以):Q]=3、 上の(2)より、Q(d, W):Q(d)]=2、 ゆえに、Q(d, W):Q)= [Q(d, W):Q(d)][Q(u):Q]=2×3=6、 一方、6=[Q(d, W):Q]=[Q(d, W):Q(W)][Q(W):Q]=2[Q(d, W):Q(W)]、 WのQ上での最十分過式 はx²+x+1なので 2 に等しい ゆえた、[Q(W)(d):Q(W)]=[Q(d, W):Q(W)]=3. したがって、Q(a, W)=Q(W)(d)=Q(W)(d) + Q(W)(d).

注意 d, Wd, W²dのQ(W)上での最小多項式がぴってであることもまされた。

- (5) dとwdのQ(w)上での最小多項式はどまらもx3-7で,
 - (1)のdかdとwdの場合より、 $Q(d,\omega) = Q(d,wd,\omega^2d) = Q(\omega d,\omega)$.

| dをWdに3つす | 自己同型を作る | 問題

体の同型写像たち $Q(d, \omega) = Q(\omega)(d) \rightarrow Q(\omega)[x]/(x^3-7) \rightarrow Q(\omega)(\omega d) = Q(d, \omega)$ $f(d) \longmapsto \overline{f(x)} \longmapsto f(\omega d)$

の今成をひと書く、のも体の同型で、 $\sigma(\alpha) = \alpha (\alpha \in Q(\omega))$ 、 $\sigma(\alpha) = \omega d$ をみたす、これでほいいのの存在が示された、

 σ は $Q(a,\omega) = Q(\omega)(a)$ の体の自己同型で、 $\sigma(a) = a (a \leftarrow Q(\omega)), \sigma(a) = \omega d を けなしているとする、このとき、任意の<math>a,b$ 、 $c \in Q(\omega)$ について、

 $\sigma(\Omega+bd+cd^2) = \sigma(\Omega)+\sigma(b)\sigma(d)+\sigma(c)\sigma(d)^2 = \Omega+bUd+cW^2d^2$ これではいての一支性も示された。

ホーケント ほしい体の同型写像は、最小多項式と準同型定理から得られる体の同型写像の合成として構成可能である。

注意

(1),(2)のながりは非正規拡大と正規拡大のながいになっている。

- (2) 体の同型写像なな $Q(\omega)(d) \xrightarrow{\longrightarrow} Q(\omega)(\chi)/(\chi^3-7) \xrightarrow{\longrightarrow} Q(\omega)(\omega d)$ の今成 U の 場合には, $f(\omega) \xrightarrow{\longrightarrow} f(\omega d)$

 $Q(w)(d) = Q(\omega,d) = Q(d,Wd,W^2d) = Q(w,Wd) = Q(w)(wd) なので,$ のの定義域と値域は等しくなり、のは $Q(w,d) = Q(d,Wd,w^2d)$ の自己同型になる

以上の(1)と(2)のちがりは Wd \oplus Q(d)と Wd \oplus Q(ω ,d)のちがりである. Q(ω ,d)は Wを含むので、 dを ω dにうっす操作で Q(ω ,d)が 閉じることが可能になる. これらのちかりを認識しておくことは重要である

問題 4-3 れは正の整数であるとし、W=5n=e2xi/nとおく、以下を示せ、

(1) $k \in \mathbb{Z} \times n$ の最大公約数が d のとき, $\mathbb{Q}(\omega^k) = \mathbb{Q}(\omega^k)$, 特に $k \in \mathbb{Z} \times n$ の最大公約数が 1 のとき, $\mathbb{Q}(\omega^k) = \mathbb{Q}(\omega)$.

以下, n=pは素数であるとし、W=5pについて考える、

- (2) $\mathbb{Q}(\omega) = \mathbb{Q}(\omega^{k}) = \mathbb{Q}(\omega, \omega^{2}, ..., \omega^{k-1})$ (k=1, 2, ..., k-1)
- (3) $Q(\omega) = Q 1 \oplus Q \omega \oplus Q \omega^2 \oplus \cdots \oplus Q \omega^{p-2}$ のすべての解を付けかえて かえた、 $\omega, \omega^2, ..., \omega^{p-1}$ は $Q \perp$ 次独立て" 末る、 できる体 \square

解答例 (1) kとれの最大公約数かけのとき、ks+nt=dをみたする、teZか存在するので、 $w^d = \omega^{ks+nt} = (\omega^k)^s \in \mathbb{Q}(\omega^k)$. ゆえに、 $\mathbb{Q}(\omega^d) \subset \mathbb{Q}(\omega^k)$ はなんの約数なので k = du、 $u \in \mathbb{Z}$ と書けるので $\omega^k = (\omega^d)^u \in \mathbb{Q}(\omega^d)$, ゆえに $\mathbb{Q}(\omega^k) \subset \mathbb{Q}(\omega^d)$ これで $\mathbb{Q}(\omega^k) = \mathbb{Q}(\omega^d)$ か示された。

d=1 & 3 12" $Q(\omega k)=Q(\omega)$.

- 以下, れニアは季数であるとし、い=ろれであるとする、
- (2) Q(W) C Q(W, W², ..., W^{P-1}) は自明であり、(2) W, W², ..., W^{P-1} \in Q(W) なので Q(W) つ Q(W, W², ..., W^{P-1})、(2) かえに、(2) Q(W) = Q(W, W², ..., W^{P-1})、(2) で (2) で

(3) 問題 2-2 (4) の結果より、 $\chi^{P1}+\chi^{P2}+\dots+\chi+1$ は Q上の既約多項式になる、 $\omega^{P}=1$ かつ $\omega+1$ と $\omega^{P}-1=(\omega-1)(\omega^{P1}+\omega^{P2}+\dots+\omega+1)$ より、 $\omega^{P1}+\omega^{P2}+\dots+\omega+1=0$ と なることがあかる

以上より、 ω の Q上での最小多項式 は $\chi^{p-1} + \chi^{p-2} + \dots + \chi + 1$ に χ_{3} ことかわかる、これより、 $Q(\omega) \cong Q(\chi)/(\chi^{p-1} + \chi^{p-2} + \dots + \chi + 1)$ 、 $[Q(\omega):Q] = p-1$ 、 $Q(\omega) = Q1 \oplus Q\omega \oplus Q\omega^2 \oplus \dots \oplus Q\omega^{p-2}$

特に、1,い,い²、…,い^{p-2}は Q上一次独立である。 のもかける操作は Q(い)の Q上での殺形同型になるので、 い,い²、い³、…, い^{p-1} も Q上一次独立である。